土坑二三〇

(19) ・「あ□□くら　(206)×24×3　051
　・「　五月三日

(20) 「五月三日」　181×20×3　051

溝一一二

(21) 「〈七月廿三日
　上安田村
　六左衛門」　64×24×4　032

土坑一七九出土の木簡は(18)を除き、完形のものはすべて下端を尖らせた〇五一型式で、物品名らしき文字を書くが、何の名称なのかは未詳。

なお釈文は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館の佐藤圭氏のご教示を得た。

9　関係文献

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『年報一〇』（一九九六年）

（本多達哉・河村健史）

石川・観法寺遺跡

1　所在地　石川県金沢市観法寺町

2　調査期間　一九九九年（平11）五月～八月

3　発掘機関　(財)石川県埋蔵文化財センター

4　調査担当者　松浦郁乃・荒木麻理子

5　遺跡の種類　集落及び道路跡

6　遺跡の年代　三世紀・八世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

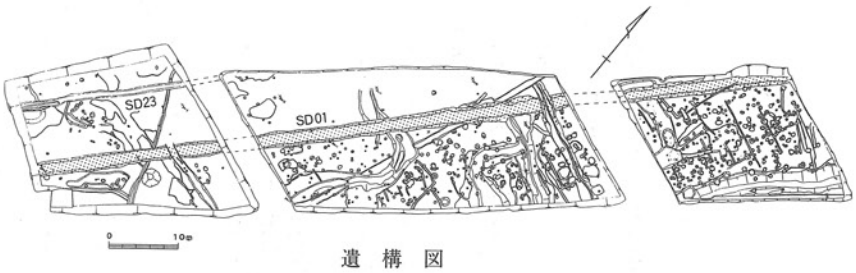
本遺跡は、金沢市の北東部に位置する。北西方向には河北潟が広がり、北は能登、東は低い丘陵地帯を越えると富山県となる。後背丘陵上には観法寺古墳群、その谷部には中世の観法寺谷遺跡が所在する。周辺の同時期の遺跡としては、北方約八〇〇mに七世紀末～八世紀前半の今町A遺跡が所在する。

（金　沢）

今回は、約二五〇〇m^2について調査を行なった。そ

の結果、古墳時代初頭の土器及び玉造関係の遺物が出土した溝、奈良時代とみられる掘立柱建物や井戸、ほぼ平行して走る二条の溝を確認した。うち一条は、調査区を貫通するように、約二〇〇mにわたって確認され、SD〇一とした。幅約二m深さ〇・五～〇・七mを測り、逆台形の断面形態を呈する。SD二三としたもう一方の溝は約二〇m確認され、幅約一m深さ〇・五mを測り、SD〇一と同様の断面形態であった。この二条の溝の性格としては、道路遺構の側溝部分と考えられる。道路幅は側溝心々距離にして約九mを測る。路面に硬化部分は認められなかった。その規模や地理的な条件、埋没時期から北陸道駅路の可能性が考えられる。

木簡は、SD〇一から出土した。この溝出土の土器類は、八世紀末頃の須恵器が多く、墨書土器と思われる個体も数点見られたが、いずれも判読不能であった。また、転用硯も数点確認できた。木製品は、建築部材とみられるものがほとんどであった。



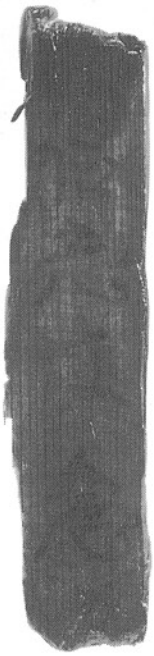
遺構図

8 木簡の釈文・内容

(1) 加志皮急 (126)×(27)×7 081

上下と左側面を欠損している。墨書は片面のみに見られ、四文字ともに墨痕は非常に明瞭である。「加志皮」については、人名とも思われる。

9 関係文献

(財)石川県埋蔵文化財センター『石川県埋蔵文化財情報』三（二〇〇〇年）

（松浦郁乃）